

ヘンデル『オルランド』の作品的特質

高 際 澄 雄

序 ヘンデルの第3発展期の端緒としての『オルランド』

長く沈滞していたイギリス演劇界は、1727-28年公演期に、王立劇場におけるジョン・ヴァンプラ原作コリー・シバー補作による『憤激の夫』の上演、およびリンカンズインフィールド劇場におけるジョン・ゲイの『乞食オペラ』の上演によって変化がもたらされ、さらに1730年ヘイマーケット小劇場におけるヘンリー・フィルディングの『作者の笑劇』および『親指トム』の制作上演によって、新活況を呈するに至った¹。

これに対して、それまで人気を博してきたイタリア歌劇は、その上演団体「王立音楽アカデミー」が、イギリス演劇界の変化とイタリア人人気歌手の高額の出演料のために破綻し、1728-29年公演期には、公演ができなくなってしまったのである。

王立音楽アカデミーは、早速建て直しを図り、翌年にはヘンデルにキングズシアターの使用権と資金を与え、これまでよりもヘンデルの支配力を強化しながら、第2次王立音楽アカデミーを発足することとなった。新体制の王立音楽アカデミーは、発足してしばらく確固とした方針を打ち出せないでいた。だが、高まる批判にイタリア歌劇への思いをさらに強めたヘンデルは、1733年、『オルランド』を作曲上演し、彼の第3傑作期の端緒を開いたのである。

この作品の重要性については、これまでヘンデル研究家によってたびたび指摘されてきた。ヘンデルのイタリア歌劇の芸術的特質を1960年代から明らかにしてきたウィントン・ディーンは『オルランド』をモーツァルトの『魔笛』と比較すべき作品だと評価している。

ところが一般観客には、優れた作品上演が欠如している故に、『オルランド』の重要性を理解することができなかった。特に日本においては、『オ

ルランド』の上演はこれまで行われておらず、発売されたCDにより理解する他方法がなかった。しかし、何度聞いても、楽譜を読んでも、音楽史家の主張するように、重要な作品とは思えなかったのである。

ところが2014年、レネ・ジェイコブズの指揮するヘント・ブロック・オーケストラの『オルランド』がCDで発売され、状況が変わった。最初聞いただけで、『オルランド』の重要性を把握でき、しかも聞けば聞くほど、意味が明らかとなる。芸術史家の指摘の正しさが、一般聴衆に素直に理解できるようになったのである。

それでは、レネ・ジェイコブズの演奏は何を明らかにしたのであろうか。本論では、彼の演奏を参照しながら、作品を分析していきたい。

1. 第1幕の詩と音楽

レネ・ジェイコブズの演奏は、風の音を多用しているところに、その特色がある。一部の批評家は、台本に書かれていないという理由で批判しているが、バロックオペラ劇場では風の音や雷の音を出す装置が備えられており、たとえロンドン公演で使われていなかったとしても、使うことで上演効果が高まるのであれば、使うべきであり、実際、結果から考えれば、優れた判断だったのである。

作品は深刻さを備えた三部形式の、しかし定式には当てはまらないフランス風序曲で始まる。その後、風の音が聞こえ、神秘感が醸し出されて、アレグロの楽章が演奏される。これは、次の緩やかな歌唱との対比を生みだすのに適切な楽曲である。

最初の歌曲は、作品を大きく包み込む登場人物、魔法使いのゾロアストロ²によってアコンパニャートで次のように歌われる。

Geoglifici eterni,
 Che in zifre luminose ogn'or splendete
 Ah! Che alla mente umana
 Altro che belle oscurità non siete.
 輝かしい光の文字で
 神秘の意味を記した永劫の象徴よ、
 限りある命の者たちに
 ほとんど理解し難いとは、なんと哀れなことか。

ここで作品の主題、つまり人間の運命は知恵あるものには明らであるのに、熱情に駆られる者たちには、理解不能となる、との主張を提示したのである。ト書きにはつぎのように書かれている。「夜。山に見える田園。山の頂上でアトラスが天を支えている。山の麓には土地の守護神たち。ゾロアストロが岩に寄りかかり、星々の動きを眺めている。」情景も神話的な設定となっている。満天の星空が風の音を含む音楽によっても表現されている。

さらにレチタティーヴォによって、主人公オルランドが最終的には栄光の敵ではなくなる、つまり軍務を遂行することになる、と予言するが、一方でそれまでの迷いをほのめかす。そこにオルランドがやってくる。オルランドは、カヴァティーナで次のように歌う。

Stimolato dalla gloria
 Agitato dall'amore
 Che farai, misero core?
 お前はどのように自らの役割を演ずるのか?
 哀れな心よ、今決めよ、栄光の力強き呼びかけ
 がお前を鼓舞しているが、
 愛はその炎全てで消耗し尽くす。

ここでも、栄光か愛かの二者択一が示されるのだが、オルランド自身は栄光も愛も可能だと考えている。ゾロアストロは窘めるが、オルランドは胸の内で栄光が弱まっているのだと答える。そこで、ゾロアストロは魔法の杖をふり、愛の神の宮殿を現出する。愛の神は玉座に座り、神の足元には古代の英雄たちが眠りこけている。ゾロアストロは、お前も愛にうつつを抜かしているところなのだから、次のアリアを歌う。

Lascia Amore, e segui Marte!
 Va, combatti per la gloria.
 Sol oblio quel ti comparte
 Questo sol bella memoria.
 愛の神と御しがたい気苦労を追い払い、
 戦場まで軍神を追いかけよ。
 愛の神はお前に忘却を与えるだけだが、
 戦の輝ける神は汝の名前を王冠で飾る。

ゾロアストロはこの後立ち去るが、オルランドは迷い続け、ついに女性の衣服を身につけても、怒りを失わなかったパーレイデースを思いつき、愛を追求しても戦意は失わない言い訳にしよう。

第3場は「羊飼いの小屋の点在する小さな森」であり、ドリンドがアコンパニャートで次のように歌う。

Quanto diletto avea tra questi boschi
 A rimirar quegli innocenti scherzi
 E di capri, e di cervi?
 Nel serpeggiar dei limpidi ruscelli
 Brillar i fior, ed ondeggiar le piante;
 Nel garrir degli augelli
 Nello spirar di zeffiretto i fiati.
 Oh giorni allor beati!
 Ora per me funesti.
 この森の中で飛び跳ねる山羊や小鹿の無邪気な遊びを
 眺めるのは、心地よいことだわ。
 水晶のように澄んだ流れが曲がりくねってせせらぎ見て、
 開きつつある花々や風そよぐ草を見つめ、
 羽ある合唱隊の囀りを耳にし、
 芳しい風の息吹に出会うのも。
 ああ、私の幸せを思いみた幸せな日々。
 でも今は悲しみのすべての源となってしまった。

歌詞の大半は、田園の喜びを歌っているが、最後の一行でこのドリンドも悲しみを抱えていることを知らされる。すると、ト書きは次のように新

しい状況を伝える。「舞台の袖から武器のぶつかり合う音が聞こえる。その後オルランドが登場し、抜き身の剣をもち、王女を導いている。」そしてオルランドがアコンパニャートで、王女を敵方から救い出したこと、そして王女は自由であるから安心するようにと歌い立ち去る。これを見たドリンドは、その武将が高名なオルランドであること、そして彼はこれから愛に苦しむ運命にあることを、レチタティーヴォで述べた後、アリアで彼女の心の騒ぎも同じ種類であるが、今は言えないと意味深長に歌って立ち去る。そこに、中国(Cathay)の王女でオルランドに救出されたアンジェリカとアフリカの王子メドロが登場する。アンジェリカは、メドロに恋していることを打ち明け、メドロもそれを聞いて、二人で、愛の二重唱(duettino)を歌う。そして、アンジェリカは短いレチタティーヴォの後、メドロへの愛をどのような状況になっても貫くと、ダカーポアリアで歌い立ち去る。

メドロが一人でいるところに、ドリンドが来る。彼女はメドロを見つけて喜び、今こそ二人の愛を成就してもらいたいと告げるが、メドロはそれは誤解で王女と一緒に来たので、一緒に行かねばならないという。ドリンドは、私を捨てるのかと詰め寄るが、メドロの心は変わらない。ドリンドは、私の愛を忘れるのではないかと尋ねる。それに対してメドロは、ダカーポアリアで、彼女の愛を忘れることはないと言いつつ、立ち去る。

ドリンドは自らの不幸を悲しみながらも、ダカーポアリアでメドロへの愛を捨てることはできないことを歌い、立ち去る。

そこにゾロアストロがアンジェリカと登場し、オルランドの報復が怖くないかと尋ねる。アンジェリカは、メドロへの愛がどのような状況でも変わることがないと言いつつ、そこにオルランドがやってきたので、オルランドの心を変えるために、彼に立ちはだかる。オルランドは彼女を見つけられなかったのが、彼女の出現を喜ぶが、アンジェリカは彼の愛する人は、戦いで救出したもう一人の女性イザベラであろうと言う。オルランドが否定すると、それではドリンドではないかという。しかし、オルランドはそれも否定し、自分の愛はアンジェリカに向けられているのだと告げる。そこに約束通りメドロがやってくる。危険を感じた

ゾロアストロは魔法の杖を振り、噴水を出現させ、メドロを隠す。そして、オルランドに自分への愛を証明してみせるように、ダカーポアリアで歌い、立ち去る。オルランドは、どのような戦いにでも赴き、アンジェリカへの愛を証明すると言いつつ、ダカーポアリアで戦いの誓いを歌って、立ち去る。

メドロとアンジェリカが登場し、メドロはアンジェリカが頻繁に会っている男が誰であるのかを詰問し、本当に愛しているのはその男ではないかと言う。アンジェリカは、その人が高名なオルランドであることを、そして彼女の愛はメドロに向けられていることを告げ、二人は抱き合う。そこにドリンドが現われ、二人が愛し合っていることを見てしまう。そこで二人は互いの愛を認め、アンジェリカは慰めに、ドリンドに宝石を渡す。ドリンドは宝石をメドロからもらいたかった、といい、三人で三重唱を次のように歌う。

Terzetto

Angelica e Medoro

Consolati o bella

Gentil pastorella

Ch'al fine il tuo core

E' degno d'amore

E amor troverà.

Dorinda

Non so consolarmi

Non voglio sperare

Più amor non può darmi

L'oggetto da amare

Che perder mi fa.

Angelica

Non perder la speme

Ch'è l'unico bene

Medoro

Hai l'alma costante

Per esser amante

Dorinda

No, solo fra pene

Il cor vivrà

三重唱

アンジェリカ、メドロ

愛らしい女羊飼いや、ついには

起きたことに慰めを得ますように。
 美德が支配しているあなたの心は
 愛に値するので、愛を得ますように。

ドリンダ

どんな慰めも私は知りません。
 わたしの悲しみが終わるとは思っていません。
 だって、ああ、愛が未来の喜びを
 私にとっておいてくれていないのですから。
 厳しい掟が私の唯一の求めである期待を
 拒んでいるのですから。

アンジェリカ

私たちの唯一の喜びであるやさしい期待を
 せっかちに壊す決心をしないでください。

メドロ

あなたの輝ける堅固な志操はあなたの魂が
 幸せな愛のために造られていることを記してい
 ます。

ドリンダ

いいえ、どこか孤独なところへ向かいます。
 そして悲しみの人生を静かに送ります。

巧みな音楽がつけられ、三人の会話となっていな
 がら、形式としてはダカーポ形式を構成している
 この三重唱は、第1幕の幕切れを飾るにふさわし
 い楽曲となっている。

こうして第1幕では、問題が提示されると同時
 に、その基本的な性格、つまり人生の不可解性、
 神秘性が示される。巧みな作曲技法であると言
 うことができよう。

2. 第2幕の詩と音楽

幕が開くと、ドリンダが木々や流れに向かって
 悲しみをカヴァティーナで歌っている。そこにオ
 ルランドが現われ、なぜイザベラのことを話した
 のかと尋ねる。彼女は、アンジェリカと話した
 だけだと答える。オルランドはドリンダが宝石を身
 につけていることに気づき、なぜアンジェリカに
 与えた宝石をもっているのかと尋ねる。そこで、
 アンジェリカからもらったこと、アンジェリカは
 メドロと相思相愛の仲であることを告げる。そし
 て、今でも自分はメドロを愛していると、ダカー
 ポアリアで歌って立ち去る。

オルランドは、アンジェリカの愛がメドロに向

けられていることを知ると、怒りを表し、次のよ
 うに怒りのダカーポアリアを歌う。

Cielo! Se tu il consenti

Deh! Fa che nel mio seno

Possa anche il ferro entrar;

Perché a un sì rio dolore

Dal misero mio core

Sappia col ferro almeno

L'uscita ritrovar.

神よ！もしもそのような不徳義が私に与えられ
 る

天命ならわたしの願いを聞き届け給え。

私の胸に剣が突き刺さることを

許してくれるように。

このように常ならぬ悲しみが重なり合い

痛みとなって私を苦しめるなら、

優しい刃で速やかに追い払ってくれることを

私は求めます。

場面が代わり、ト書きに従えば「庭園。一方に
 月桂樹の繁み。もう一方は洞窟の入り口。」ここ
 でゾロアストロは、メドロとアンジェリカの不注意
 を叱責する。二人はオルランドから逃げてきた
 こと、そしてメドロはオルランドを恐れていない
 ことを告げる。これに対して、ゾロアストロは愛
 には理性が必要であることを、ダカーポアリアで
 次のように歌う。

Tra caligini profonde

Erra ognor la nostra mente

S'ha per guida un cieco Nume.

Di rovina sulle sponde

E' in pericolo imminente

Se ragion non le dà il lume.

終わりのなき暗き迷路を

不注意な人間はさ迷う、

目の見えぬ神が案内人ならば。

宿命の道を辿り

不可避の破滅に至る、

理性が伴わないならば。

ゾロアストロが立ち去ると、恋人たちは逃げる

準備をするために、互いの愛を確かめて分かれる決心をする。メドロは、美しい田園を去る悲しみを次のような、印象深いダカーポアリアで歌う。

Verdi allori sempre unito
 Conservate il nostro nome
 Come unito sarà il cor.
 E poi dite a chi lo miri
 Da qual mano, quando, e come
 Fosse in voi sì ben scolpito
 Se volete, che sospiri
 Invidiando il nostro amore.
 わたしたちの名前が共に刻まれている
 木々たちよ、残って野をかざりつづけておくれ。
 刻まれた名前は私たちの
 心が常に結ばれていることを教えている。
 そして眺める者すべての人に
 どんな手がかくも見事に最初跡付けたか、
 どのような大義に二人が関わり、
 その忠実な保護に委ねているかを告げておくれ。
 もし私たちの比べるものなき愛が
 眺める人たちにうらやましく思われるなら。

このアリアは後に『アルチーナ』のルッジェーロのアリアでさらに印象的に使われるが、ここでも忘れがたいアリアとなっている。

アンジェリカは、一人、オルランドの愛に応えられない自分を正当化する。一度魅惑的な美の威力に捉えられてしまうと、美德も、忍耐も、功績も、役に立たないのだと。そして次の歌詞をダカーポアリアで歌う。

Non potrà dirmi ingrata
 Perché restai piagata
 Da un così vago stral.
 Se quando amor l'offese
 Ei pur mal si difese
 Dall'arco suo fatal.
 理性が嫌悪を支配する力をもっているとすれば
 私を恩知らずと呼ぶことはできないだろう。
 私の弱く、抵抗力のない心は
 あの愛らしい矢に射抜かれてしまったのだから。

あの方だって愛が燃え上がってしまったらどの
 ように抵抗しても
 その宿命の打撃を逃れられないことを
 知っているのだから。

彼女が立ち去ると、怒りに燃えたオルランドがアンジェリカとメドロを追ってやってくる。そして、木々に二人の名前が刻まれているのを見て、その怒りは頂点に達し、洞窟に飛び込む。

そうとは知らないアンジェリカは、帰国のためにメドロと待ち合わせたこの場所にやってくる。そして、田園との別れを、ダカーポアリアで次のように歌う。

Verdi piante, erbe liete
 Vago rio, speco frondoso
 Sia per voi benigno il ciel.
 Delle vostre ombre segrete
 Mai non turbi 'l bel riposo
 Vento reo, nembo crudel.
 花咲く茂みよ、木々多き情景よ、
 愛らしい小川よ、緑の洞窟よ、
 いつも澄んだ空が
 あなたたちを活気づけてくれますように。
 破壊的な嵐があなたたちの生む
 旨き甘美な果物を損ねることがないように、
 あなたの密かな木陰の
 静かな安らぎを侵略することがないように。

ところがこの後、洞窟から出てきたオルランドに見つかってしまい、追いかけられる。後から来たメドロは、彼女を助けに森に入っていく。再びアンジェリカが現われ、アリオーソで愛の神に助けを求める。さらにメドロに呼びかけると、オルランドが現われ、メドロを呼んでも無駄だと言う。すると大きな雲が現われ、アンジェリカを包んで彼女を運んで行く。雲は4人の守護神に守られている。これに対しオルランドは、アコンパニャートで、忘恩のアンジェリカをののしり、彼女を運び去った雲の送り主を呪詛する。そしてカヴァティーナでつぎのように歌う。

Già latra cerbero

E già dell'Erebo

Ogni orribile

Squallida furia

Sen viene a me.

いま地獄の番犬ケルベロスが吠え出し、
恐ろしき復讐の女神が不気味な声を上げ始める。

死者のあらゆる暗き場所から
瘦せこけた者たちが
私の周りに集まり始めている。

そしてさらにアコンパニャートで、復讐の女神
とアンジェリカを混同し、メドロにさえ憐れみを
かける。そしてアリアで次のように歌う。

Vaghe pupille, non piangete, no

Che del pianto ancor nel regno

Può in ognun destar pietà;

vaghe pupille, non piangete, no

ma sì, pupille, sì piangete sì

che sordo al vostro incanto

ho un core d'adamanto

né calma il mio furor

ma sì, pupille sì piangete sì.

ああ麗しき目よ、もう涙を流すことはない！

この悲しみの世界でも、

これほど心動かす光景に

復讐の女神さえ怒りを捨てる。

ああ麗しき目よ、もう涙を流すことはない！

そう、むしろ忍び泣きをしなさい。

あなたの魅力的な悲しみにも

わが金剛のような心は抗うからだ。

わたしの怒りは優しさを知らないからだ。

そう、むしろ忍び泣きをしなさい、永遠に。

オルランドは、この後、ト書きに従えば、「洞窟に激しく飛びこむ。すると洞窟が割れて開き、戦車に乗ったゾロアストロが現われる。彼はオルランドを腕でつかみ、空に向かって飛んでいく。」

この幕は、素晴らしい音楽にあふれている。アンジェリカとメドロのアリアは、極めて内容の濃いダカーポアリアである。ドリンダの歌唱は、最

初のカヴァティーナで田園的な雰囲気醸し出し、悲しみのアリアは、低音部が響き、パストラルの伝統に立脚している。危機の時に救済に現われるゾロアストロは、神的な力を表わし、なによりオルランドの最後の狂乱場面に、音楽の創意工夫が施されている。つまり、最初は一アコンパニャートで、つぎにカヴァティーナで、さらにアコンパニャートが続き、最後にアリアとなるが、決して伝統的なアリアではなく、アコンパニャートやカヴァティーナと区別することが不可能なアリアである。つまり、オルランドの台詞は、まるでバロックの幻想曲のように、オルランドの幻想世界の表出となっているのである。まったくの独創的表現である。まさに、この第2幕こそ、ヘンデルの作曲家としての能力が全面的に示されていると言ってよい。

3. 第3幕の詩と音楽

短かいが魅力的なシンフォニアで幕が開く。最初の場面は、ト書きによれば、「ヤシの繁み」である。メドロがドリンダに、何かあったらドリンダの住まいに身を寄せようと話していたと伝えると、起こったことが信じられないドリンダは、なぜ私の家に身を寄せることになったのかと尋ねる。すると、それはアンジェリカの望みだったと答える。今でもメドロに思いを寄せているドリンダは、あなたの愛で来てほしかった、でも自分の家は二人にいつでも提供すると言う。それに対し、メドロは詫げる気持ちを次のダカーポアリアで歌う。

Vorrei poterti amar

Il cor ti vorrei dar

Ma sai che mio non è.

E s'io ti dessi 'l cor

A un cor, ch'è traditor,

Tu non daresti fe'.

私の魂はあなたへの愛に傾いている。

あなたに与える心があればよいのだが、

その心はすでに私のものでなく、

もう一人の麗しの人のために私は生きているのだ。

美しい娘よ、一度あなたを欺いたわたしを、

あなたはもはや信じないだろうが。

メドロが立ち去ると、ドリンドは率直に心を打ち明け、詫びる気持ちをあらわしたメドロを受け入れ、彼への思いは変わらないとつぶやく。そこにオルランドが現われる。彼はドリンドをアンジェリカと間違い、ついに捕まえたという。名高いオルランドに愛されたのかと一瞬喜ぶが、思い直して、私を嘲笑するつもりかと問い正す。これに対して、愛は嘲笑を容れる余地なく、もはや耐えがたいのだと答える。名高いオルランドを手に入れば大きな誇りとなるとは考えるが、ユピテルに愛されたレダを思い出し、慎重に見極めようとする。これに対してオルランドは、死ねばいいのか生きればいいのかと再び尋ねる。

さらにアリオーソで、オルランドはウェヌスに祈りを捧げ、愛する者と結ばれるように、と言う。ドリンドはあなたのような高貴な人の血を、わたしのような羊飼いの身分の者と混じらせたいのかと尋ねる。オルランドは再びウェヌスに、愛する者と結ばれるように祈る。ドリンドは、自分の名前を告げる。これに対して、オルランドは、アンジェリカを守るために戦って死んだアルガリアだろうという。ドリンドは、オルランドが狂乱していることに気づく。オルランドはアルガリアを倒したフェッラウと素手で戦うために、剣も冑も捨てて。そして、次のアリアを歌う。

Già lo stringo, già l'abbraccio
Con la forza del mio braccio
Nuovo Anteo l'alzo da terra:
E se vinto non si rende
Perché Marte lo difende
Marte ancor io sfido a guerra.
Son morto, a caro bene,
Trafitto da rie pene
今私は腕の力の限り
戦いの敵を捉まえ
あらたなアンタイオスを地面から
抵抗できぬように抱え上げる。
彼が降伏を軽蔑し
マールスを守護者にしたとしても
戦いの神マールスに対してさえ

決死の戦いを挑んでやるのだ。

ああ、わが麗しの人よ、
力なき絶望の痛みに私は貫かれ、
わが魂は守りようもなく混乱し
体は元気を失って地面に横たわっている。

この歌曲はダカーポアリアの形式をとっているが、普通のアリアと違って、メロディーラインが明確でなく、伴奏の楽器も歌唱と同じ音程をなぞっているだけで、アコンパニヤートと言っても変わらない。ここでも、第三幕最終場面のオルランドの狂乱状態が続いていることを、歌詞の内容と同様、音楽によっても表わしている。作曲者の独創性が端的に表われた楽曲となっている。

オルランドが去った後、アンジェリカがメドロに会うためにやってくる。ドリンドは、オルランドの狂乱の状況を伝える。アンジェリカは、オルランドに救出され、彼の愛に応えられないことを忘恩の行為と認めつつも、メドロへのいかんともしがたい恋心を伝え、つぎのダカーポアリアを歌う。

Così giusta è questa speme
Che se l'alma ancora teme
Ingannata è dal timor.
Ma in chi nacque per l'affanno
La speranza è quell'inganno
Che il piacer cangia in dolor.

心地よい希望が正当にも生まれると、
心の平安を支配するあの恐れを抱く魂は、
惑わされるのです。
ああ、わたしたちは悲しむために生まれている
ので、
安心を約束する希望は、
ただ惑わす役割を果たし、すぐに喜びは悲しみ
に変わるのです。

このように歌って立ち去ると、ドリンドは、恋愛の苦しさについて語り、次のようなダカーポアリアを歌う。

Amor è qual vento
Che gira il cervello

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor.

Se uniti due cori

Si credon beati

Gelosi timori

Li fan sfortunati

Se un core è sprezzato

Divien arrabbiato

Così fa l'Amor.

愛はしばしば頭脳を激しい渦に

巻き込む突風。

聞き及ぶところ、最初は心に

密やかな喜びを与える。

だが束の間の喜びの代わりに

悲しい持続的な悲嘆が長く続く。

愛が優しい二人の心を結び合わせると

その穏やかな喜びを愚かにも歓迎する。

もし妬みの不安が大きくなると、

有頂天の源が無くなってしまう。

そして心が嫌悪されると

苦痛に耐えられなくなり、

すぐに命取りの錯乱状態となる。

これが愛の奇妙な結果なのです。

この歌曲が素晴らしいのは、これまで典型的な女羊飼いであり、豊かな田園で無邪気に恋愛にあこがれていたドリンドが、経験を経て、ゾロアストロの視点に近接して事態を眺められるようになったことを歌詞が表わしているだけでなく、付された音楽もその内容にふさわしく、複雑化していることである。まず序奏で低音が強調され、パストラルであることが示された後、歌詞が次のように主として繰り返すにより、展開される。下線部はメリスマ唱法によって歌われることを示している。

Amor è qual vento

Che gira il cervello

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor.

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor.

Amor è qual vento

Che gira il cervello

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor.

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor.

(間奏)

Se uniti due cori

Si credon beati

Gelosi timori

Li fan sfortunati

Se un core è sprezzato

Divien arrabbiato

Se un core è sprezzato

Divien arrabbiato

Così fa l'Amor,

Così fa l'Amor.

(間奏)

Amor è qual vento

Che gira il cervello

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor.

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor.

Amor è qual vento

Che gira il cervello

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor.

Ho inteso che a cento

Comincia bel bello

A farli godere.

Ma a un corto piacere

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo dolor,

Dà un lungo, dà un lungo dolor.

印象的なのは、メリスマ唱法が効果的に使われていて、純朴な田舎娘から、成熟した女性への変化が感じ取れるように作曲されていることである。ある意味でここを転換点として、急速に解決に向かって行く。

ドリンダが立ち去ると、ゾロアストロが現われ、彼の手下の守護神たちにその場を恐ろしい洞窟に変えるように命ずる。そして、オルランドを英雄にふさわしい生き方に戻すと宣言して、ダカーポアリアで、だれでも間違いはするが、誤りに気づけば、また新しい未来が開けてくると歌い、立ち去る。

ドリンダとアンジェリカが現われる。ドリンダは泣いている。アンジェリカがその理由を尋ねると、大変なことが起った。オルランドがドリンダの住居を破壊し、メドロがその家の下敷きになってしまったと告げる。

そこにオルランドが現われる。アンジェリカは私を殺せと詰め寄る。オルランドは、アンジェリカには死こそふさわしい、と答える。ここから二人の二重唱が始まる。歌詞は次の通りである。

Angelica

Finchè prendi ancora il sangue

Godi intanto

De' miei lumi al mesto umor.

Orlando

Sol ha sete di sangue il mio cor

Angelica

Che dell'alma mia, che langue

Questo pianto

E' sangue ancor

Orlando

Ma non placa il mio giusto rigor

アンジェリカ

あなたが私の血を流すまで

この流れ出す悲しみの

涙を楽しみなさい

オルランド

私の求めるのは血のみ。

アンジェリカ

私の命を奪う宿命を嘆く

涙は

私の命の血とともに流れ出しているの。

オルランド

しかし私の怒りには

慰めの静けさをもたらしてくれない。

この二重唱は、アンジェリカの悲しみと、オルランドの怒りを巧みに対比して秀逸である。やがてオルランドはアンジェリカを掴み、洞窟に投げ入れる。すると洞窟はすぐに軍神マールスの美しい神殿に変わる。オルランドは自分が世界の害悪を取り除いたと言い、やがて眠りに誘われる。オルランドはアリオーソで次のように歌う。

Già l'ebro mio ciglio

Quel dolce liquore

Invita a posar.

Tu perfido amore

Volando o scherzando

Non farmi destar.

この純粋な飲料を飲んだおかげで

酩酊し

その効力を今感じている。

私の力ない目は穏やかな眠りに誘われる。

お前、不実な愛よ、

備え持っている悪意ある罠で

悲嘆の日々を長くしないでくれ。

目覚めるまで、甘美な休息を与えてくれ。

ゾロアストロが現われ、ついに愛の神の罠にオルランドが抗う時が至ったと宣言し、天から癒しの水をもたらすように歌う。そして魔法の杖を振ると、4人の守護神に守られ、鷲が黄金の瓶をくわえて下りてくる。ゾロアストロがそれを受け取ると、鷲と守護神は天に帰って行く。ドリンドとアンジェリカはオルランドをそのままにしてくれるように頼むが、ゾロアストロは水をオルランドに振りかけ、立ち去る。オルランドは感覚を取り戻し、なぜ自分が胃も付けず、剣ももっていないのか、訝る。ドリンドはその訳を教えたいが、彼が殺したアンジェリカやメドロのように、彼女も殺されてしまうのではないかと伝える。それを聞いたオルランドは、自分の所業を知り、もはや生きる理由はないと絶望する。これを見て、再び狂乱に陥るのではないかと恐れたドリンドはその場を去る。そこに、全てを変える二重唱（duettino）がオルランドとアンジェリカによって歌われる。

Orlando

Per far mia diletta

Per te la vendetta

Orlando si mora.

Angelica

Dei vive ancor.

オルランド

私の恋人の死の復讐に備え、

オルランドは絶望の果てに

身を投げて死ぬのだ

アンジェリカ

ああ、どうか生きて！

死んだと思ったアンジェリカが現われたことに驚き、生きていたのかと尋ねる。アンジェリカは、自分もメドロも生きていと伝える。そこにゾロアストロが現われ、未来の栄光のために、彼がアンジェリカもメドロも助けておいたのだ、そして二人を許すように求める。ドリンドも現われて、同じ懇願をする。

これに対し、オルランドは彼の輝かしい栄光のために、これ以上懇願しないように告げる。その瞬間、軍神マールスの像が神殿に立ち上り、祭壇には火がともされている。オルランドはアコンパニャートで次のように歌う。

Vinse incanti, battaglie, e fieri mostri

Di se stesso, e d'amor oggi ha vittoria.

Angelica a Medoro unita godi.

彼（オルランド）は誘惑に抗い、戦いで勝利してきた。

しばしば獐猛な怪物を平らげた。

そして今、自分自身と愛の神に勝利したのだ。

アンジェリカ、メドロと結ばれよ。

これに対して、アンジェリカ、ドリンド、メドロ、ゾロアストロはオルランドの高潔な行為を称賛し、全員のコーロに入る。

Orlando

Verso Angelica e Medoro

Trionfa oggi 'l mio cor

E da sì bell'aurora

Avrò più bello ancora

Un giorno il vostro amor.

Angelica e Medoro

Trionfa oggi 'l mio cor

E con più lieta face

La fedeltà, la pace

Risplenderà d'ognor!

Dorinda

Mi scordo ogni dolor

Oblío quel che m'affanna

V'invito alla capanna

Per festeggiar ancor.

Tutti

Con un diverso ardor
Giacchè ciascun è pago
Dar lodi sol sia vago
A gloria ed all'amor.

独唱および合唱

オルランド アンジェリカとメドロにたいして
私の心はすべての気苦労に打ち勝ち、
この美しく輝く穏やかな曙光は
あなたたちの輝かしい愛の日の
光る序奏となるだろう。

アンジェリカ、メドロ

私のところはすべての気苦労に打ち勝ち、
堅固な志操と平穏が
蓄え持つ、甘美な持続的喜びを
以前にも増して分かち合うでしょう。

ドリンダ

私はもはやこれまで嘆いた
これまでの悲しみを忘れましょう。
そして私の小屋にあなた方を招き
愛の祝祭の喜びを表しましょう。

全員

すべての胸に安らぎが宿り、
さまざまな歓喜で燃え上がります。
お互いに、愛と栄光を、心から
称賛することにしましょう。

このようにして、作品は大団円を迎える。最後の曲は、短いながら、喜びにあふれており、最終曲にふさわしい。

第3幕では、第2幕での問題が解決し、観客は深い充足感を味わうことができるのである。

結び 巧みな作曲技法

『オルランド』がこれまで上演によって作品の特質を十分に明らかにすることができなかったのは、魔法オペラの持つ超現実的要素を十分に評価できなかったからである。逆にいえば、レネ・ジェイコブズの演奏が『オルランド』上演史において画期的であったのは、その超現実的要素を作品の中心に据えたからである。すなわち、ゾロアストロの存在の重要性を十分に考慮し、彼の持つ神秘性や自然との強い結び付きを十分に評価したためである。

18世紀にも、すでに一部の文人は問題の解決に天空から下りてくる戦車や、神の登場を、非現実的であるとして、イタリア歌劇を馬鹿馬鹿しい作品と非難していた。ヘンデルのイタリア歌劇が18世紀後半から上演されなくなってしまったのは、この考えが主流となったからであった。

しかし、20世紀の音楽史家が明らかにしたように、ヘンデルのイタリア歌劇作品は、芸術的な魅力をもっていた。そして『オルランド』も、魔法使いや、天空から現われる戦車の存在にもかかわらず、というより、その存在のために、きわめてすぐれた作品となっているのである。その特質を挙げてみよう。

1 総合性

17世紀後半から18世紀前半のイタリア歌劇には、大きく3つの種類が存在した。もっとも多いのが英雄オペラであり、歴史上の英雄を主人公として、戦いと愛を中心として展開するものである。ヘンデルで言えば、『ジュリオ・チェーザレ』がその代表であり、シーザーとクレオパトラの恋愛を中心として物語が展開している。

第2は、魔法オペラであり、魔法使いが重要な役割を果たすものである。その代表作が、ヘンデルのロンドンデビュー作となった『リナルド』で、そこではアルミーダのアリアがコロラトゥーラで歌われ、女魔法使いの魅力が余すところなく表現されていたので、この作品を人気作としたのであった。

第3は田園オペラであり、イギリスではあまり流行らなかった。とくにヘンデルの『忠実な羊飼い』は、イタリアの田園オペラを移植するために作られたのだが、大きな人気を博することはなかった。しかし、歌劇ではないが、ヘンデルの『エイシスとガラティア』は、田園オペラの魅力をもっている。のちにヘンデルはこの作品を歌劇に変えて、一定の人気を得た。

さて、『オルランド』には、この3種が巧みに組み合わせられているのである。ゾロアストロにまつわる様々なものが、魔法オペラのものであることはいままでもない。彼は、守護神たちを手下にもっており、また驚を呼ぶこともできる。魔法の杖で、洞窟を作ることでもできれば、愛の神の神殿も出現させることができる。そのために、レネ・

ジェイコブズは、風の音を出す機械を使って、神秘性を醸し出したのである。

一方、オルランドは、伝統的には英雄オペラの主人公であり、アンジェリカとメドロは、そのアリアにおいても、純粋な王女であり、王子である。2人の歌うアリアはすべて優れた伝統的なアリアである。

そして、田園オペラの要素が、ドリンドに現われている。その歌詞の素朴さ、田園の美しさの賛美、そして楽曲においても、特にアリア *Amor è qual vento* では低音が強調されて、田園音楽であることが示されている。

この3種が巧みに組み合わされていることが本作品の魅力になっていることは論をまたないだろうが、これまで、魔法オペラの要素が軽視されてきたために、『オルランド』の魅力が明らかにならなかったのである。レネ・ジェイコブズの演奏は、この巧みな組み合わせを明らかにすることによって、『オルランド』の限りない魅力を教えてくれたのである。

2 登場人物の成長

『オルランド』における特質の第2は、登場人物の成長が明らかにされていることである。大きな成長を遂げるのは、主人公オルランドである。現代で言えばストーカーともいえるオルランドは、アンジェリカの救出と彼女への恋、そして失恋と狂乱を経て、真の解決は自身の成長にしかないことを悟る。もしここにあるように、彼女への愛を返さないからといって、彼女を殺害すれば、永遠に苦しむことになるだろう。アンジェリカがオルランドを愛さないからといって、彼女の非ではない。救出には感謝で十分なのであり、それ以上を求めることはできない。そのことをオルランドは最終的に理解するのである。

同様にドリンドも、メドロへの恋から、失恋、そして恋のもつ非理性性の理解へと進んでいく。そしてその痛みを越えて、彼とアンジェリカの結婚を祝するのである。この人間的な展開が、英雄たちの恋愛を綾どり、アンジェリカとメドロの優れたアリアを一層意味あるものとしている。

3 細やかな楽曲配置

『オルランド』の第3の魅力は、オルランド狂乱の場に典型的に見られるように、細やかな楽曲

の配置である。第2幕最終場のオルランド狂乱の場では、オルランドの歌詞が、アコンパニヤート、カヴァティーナ、アコンパニヤート、アリアとなっているのだが、アリアとは言っても、アコンパニヤートやカヴァティーナとほとんど変わっていない。つまり、オルランドの歌曲全体が大きな1つの楽曲と考えるべきなのである。

第3幕は、全体が有機的に結ばれた楽曲と見ることができる。確かにアリアは存在しているのだが、第2幕のように独自の主張をするものではない。大団円に向かって進んでいく一段階となっている。そのため、そのため最終のコーロが短いにも関わらず、見事な終曲となっているのである。

このように、レネ・ジェイコブズの演奏は、一部の音楽史家の理解に留まっていた『オルランド』の魅力を一般観衆にも理解可能とした。そのため、彼の演奏は『オルランド』の演奏史上画期的なのである。

¹ 詳しくは拙論『ヘンデルと1730年代初頭のイギリス演劇界』を参照のこと。

² 先行する『オルランド』の台本にはゾロアストロは登場していない。誰がこの登場人物を考えたかは、不明だという。詳しくは、Winton Dean, *Handel's Operas II* (The Boydell Press, 2006) P.240 を参照のこと。

参考文献

- Avery, Emmett L. Ed., *The London Stage 1660-1800*, Part 2, Vol.II, Southern University Press, 1665.
 Hume, Robert D., *Henry Fielding and the London Theatre 1728-1737*, Clarendon Press, 1988.
 Hogwood, Christopher, *Handel*, Thames and Hudson, 1984.
 Scouten, Arthur H. Ed., *The London Stage 1660-1800*, Part 3: 1729-1747, Southern Illinois University Press, 1966.

(本論は平成 25-27 年度科学研究費補助金研究「18世紀前半イギリスにおけるオラトリオ形成への笑劇とバーレスクの影響」(課題番号 25370267)の研究成果の一部である。)

Characteristics of Handel's *Orlando*

TAKAGIWA Sumio

Abstract

The importance of Handel's *Orlando* has been clearly stated by eminent Handel scholars like Winton Dean. However, for common lovers of Handel's Italian operas, it was difficult to understand the greatness of *Orlando*, because the four different sets of CDs of *Orlando* performance were not good enough to persuade common audience the importance of the opera.

The set of CDs of the performance of the work by Rene Jacobs conducting B'Rock Orchestra of Ghent enabled common audience to understand its significance. This article analyzes the work by using Rene Jacobs' performance.

The results of the analysis are as follows.

1. Unification of the three different types of the Italian opera.

In Eighteenth-century London, there were three different types of the Italian opera: heroic opera, magic opera and pastoral opera. By emphasizing the importance of the elements of magic opera, Rene Jacobs succeeded in showing the unification of the three types, which proved Handel's great skills in musical composition.

2. Growth of the two characters.

Orlando is placed in difficult situations. He loves Angelica but Angelica loves Medoro. For some time he behaves like a modern stalker, but in the end he realizes he has to give up the return of his love by Angelica, and allows her to marry Medoro. Dorinda also grows from a simple country girl to a matured woman. The growth of these two characters adds the work humane atmosphere.

3. Delicate musical composition

In the last scene of Act Two, Orlando raves because Angelica deceived him. His words are composed into an *accompagnato*, a *cavatina*, an *accompaniato*, and an *aria*. However each songs are so similar, his words should be regarded as one song. In the same way Act Three should be regarded as one big movement. This is the reason the final impression is so deep.

(2015年6月1日受理)